

## 《第50回源立寺法華講総会記念文集》

### 目 次

巻頭言	菅野憲道	1
源立寺法華講と正信覚醒運動の始まり	尾林弘三	2
遠い日の思い出	山田 昌	5
源立寺法華講第五十回記念総会に寄せて	松井照雄	6
業論	武政佳且	8
私の中の法華経信仰を振り返って	針本登代子	10
今の私に出来ること	細川美恵	11
たゆむ心なく唱題を	津村尤子	12
今、思うこと	布江幾代子	13
『恵日』を心の支えとして	坂口久子	14
法灯相続が望み	沼波博子	14
お母さんの詩	乾美津子	15
猫は地震を予知する	宮崎和子	17
感謝	井上真理	19
第五十回の記念総会を迎えて	北森京子	21
お題目と私	宇都宮賢明	22
母の命を受け継いで	佐藤千賀子	23
知恩報恩を目指して	宮川力夫	24
月々日々につより給へ	黒木光子	25
種子を蒔いていけるように	寺川晴美	26
御本尊様のお導きを信じて	N	27
信心の向上が出来るように	吉正富士子	29
「公と個」についてめぐる思い	橋本良介	30
異体同心の信心を	森 秀之	35
恵日だより		39

# 巻頭言

## 是好良薬

菅野 憲道



源立寺法華講は毎年総会を開いて法燈相続の一里塚としており、今年は第五十回目の節目を迎える運びとなりました。そこで、講中の皆様にその所感や思いなど投稿をお願いしましたところ、多数お寄せ頂きましたので、記念特集号として発行することにいたしました。

総会は新型コロナウイルスの感染防止の立場から、今秋または来年まで延期となりますが、一足早く、誌上での総会と思っただき、講中各位の皆様、ありのままの信念・信仰の声に何かをくみ取っていただければ幸いです。

疫病の流行について、日蓮大聖人は「或は身はやまねども心は大苦に値へり。やむ者よりも怖し。」(松野殿御返事)と仰せられているように、たとえ感染を免れたとしても、その不安、恐怖は深刻なものがあります。ましてや医療の現場で働く方々のストレスは想像を越えるものがあります。そこで求められるものは精神的なタフさであります。

また今回の災難は、国難を通り越して世界的な災難であり、人類全体が一致協力して対処しなければ真の克服は難しいでしょう。紛争地帯や貧困国に潜在的に広がったウイルスが感染爆発の火薬庫となり、波状的に世界に流行をもたらすからです。国境の出入りを制限して水際作戦をとつても限界があることは今回のことで明らかです。すなわち現代社会における国家や民族の対立関係や大企業の競争関係などから、一転して協調、共生のスクラムを組むことが求められる所以です。

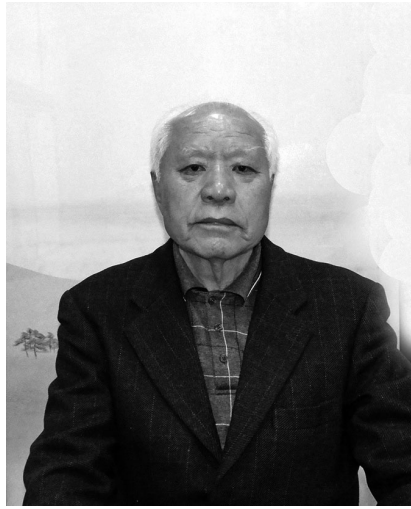
結局のところ、現代人の世界観、価値観、生命観等に通底する利己主義の病弊(三毒)を治癒せずには、いつまでも三災七難は尽きることがないというのが法華経の教えなのです。

この度の新型コロナウイルス流行を試練と受け止め、来たるべき総会には、大難を乗り越えてさらに成長した姿で集いたいと思います。

「是の好き良薬を今留めて此に在<sup>お</sup>く。汝取<sup>い</sup>つて服すべし。差<sup>い</sup>えじと憂<sup>い</sup>うること勿<sup>い</sup>かれ」(寿量品)

## 源立寺法華講と正信覚醒運動の始まり

講頭 槻木地区 尾林弘三



講頭：尾林弘三さん

今の源立寺法華講が結成されたのは、創価学会が組織的に折伏活動を始めた頃で、全国の法華講も連合会として組織され、関西でも、当時一番活発に活動

昭和三十八年十月六日、第一回法華講総会が開催され、二回目の総会は、昭和四十七年四月九日に開催され、以後毎年開催されるようになった。

昭和五十年十一月十八日、高玉広応師の逝去により、向島秀浩師が住職に就任された。

昭和五十二年一月に、創価学会は、在家中心の独立路線を発表した。

大石寺では、『富士学報』が発刊されて、これに菅野憲道師が、創価学会を批判する論文が掲載された。

本山の教学部長であった阿部信雄師が、この論文を学会本部に持参してご注進したことから、創価学会本部は、菅野憲道師を呼び出して吊し上げを行ない、以降、学会に批判的な僧侶の吊し上げもしたのです。

昭和五十二年十二月十六日に、活動家僧侶が源立寺に集まって、初の会合が行われた。この頃から、正信覚醒運動が活発になってきた。

源立寺でも、この頃から向島住職が御講の講話の時に、学会の信心を批判されて、学会からお寺の檀徒に変わる事等を述べられるようになった。

昭和五十三年二月二十二日、大石寺にて時局懇談会が開かれ、学会との協調路線の件で紛糾した。

四月に、法華講青年部登山があり、日達上人猥下お目通りの時、

「今の創価学会の信心はおかしくなっている。君たち法華講の青年がしっかり信心して、日蓮大聖人の仏法を正しく世に

していた堅持院が中心になって、日蓮正宗法華講連合会関西地方部が結成された。

源立寺では、昭和三十三年十一月十三日に、前講頭の古江正義氏が尽力されて、初代講頭山田安次郎氏の就任を得て、源立寺法華講支部が結成された。

昭和三十五年五月二十三日、浅井広竜住職は、下之坊へ転任となり、高玉広応師が住職に就任された。

高玉住職は、現在の本堂と庫裏を再建されて、日達上人猥下の御親教を仰がれた。



菅野ご住職の着任により、源立寺法華講は新体制に（昭和 54. 4）

継承して行く様に頑張ってください」と、訓示されたことを今も覚えています。

昭和五十四年二月二十五日、初の源立寺檀徒総会が開催されて、初代代表に原田晴吉氏が選ばれた。

三月十三日、向島秀浩師が急逝された。

三月十九日、妙昇阿秀浩房本葬儀の時、日達上人猊下のお話のなかで、源立寺には芯のあるしつかりした住職が必要である、適任者を選んで着任させるから、とお考えを述べられていた。

四月十六日、菅野憲道師が、千葉県安房小湊の蓮生寺より転任し、源立寺住職に着任された。

七月二十二日、日達上人が急逝された。その日に、阿部信雄師が、日達上人から相承を受けていたと詐称して、管長の座に就任したのです。

阿部師が管長になると、本山の規則を変えて、池田大作を擁護し、学会批判を禁止したのです。

これに対して、日本武道館で全国檀徒大会が計画された。これに、法華講連合会も参加を検討し、関西でも甲子園にあった富士会館で役員会が開かれた、討議の中で、もしかすると大会に出席した僧侶の処分があるかも知れない、という意見もあったが、法華講連合会も全面的に応援することとなった。

昭和五十五年九月二十五日、阿部管長は、全国檀徒大会に出席した、五人の僧侶を擯斥とし、二百一名の僧侶の懲戒処分を下したのです。

これに対して。正信会は、昭和五十六年一月二十一日、阿部師の職務執行停止を提訴した。

この判決は、平成五年七月二十日、大量処分事件他、最高裁判決で、双方却下と判決が下された。

昭和五十五年十一月二十二日、第一回源立寺法華講入講式を、池田文化会館に於いて開催し、檀徒を法華講に入講させて、三百五十所帯の源立寺法華講となったのです。

菅野住職は、法華講の運営が出来るよう改革をされ、組織の編成・講則の改定を行い、毎月役員会を開催し・年間行事予定を立て、一日のお経日・興師会・目師会・法華経講義・各種の研修会等を開催して、講中の信心向上の推進を図られた。

昭和五十六年二月二十二日、正信連合会結成式が大阪市塚本の蓮華寺で行われた。

昭和五十六年十月十日、菅野住職の尽力で、僧侶の勉学修行の場所として、岡山に興風談所が開設された。

興風談所は、『日興上人全集』、『日興上人御本尊集』等の刊行（日興上人生誕七五十年記念出版）や、後の「日蓮聖人の世界展」の図録作成に協力された。

昭和五十七年二月八日早朝、阿部宗門側は、創価学会弁護士と青年部とともに、菅野住職に擯斥処分の通知と、源立寺建物明け渡しの提訴に訪れて来たのです。これを受けて、菅野住職は、直ちに地位確認の提訴をした。

また、源立寺法華講には、豊中の本教寺に転籍の指示が下された。

二月二十三日、古江講師ほか法華講役員連名、講員多数の署名の抗議文を、阿部日頭師宛て送付した。

この訴訟の判決は、平成二年二月十六日、大阪地裁判決が出

て、双方却下となった。

平成七年一月十七日、阪神淡路大震災が起こり、源立寺は屋根瓦がほとんど降り落ちる、大きな被害を受けた。

菅野住職は、二月二十八日に修復委員会を開き、源立寺修復の為の募財（特別御供養）を講員にお願ひして、二月と三月の御講日に集めた。募材は、他に、他寺院のご僧侶見舞金・他講中寺院見舞金・正信会義援金等も有り、八千参百万円の資金が調達できた。

四月八日の第四回修復委員会で、一、募財収入明細報告と、二、修復事業予算案の説明があった。

『恵日』五月号に「修復事業予算案」、六月号に「源立寺修復事業募財報告」を掲載している。

三月一日、菅野住職は、この忙しい中で、かねて計画していた、『恵日』の第一号を創刊された。

本堂の修復はほぼ完成し、七月十六日、本堂修復記念法要並びに第二十五回法華講総会が開催された。

次に、山門とトイレ改築の工事をしている所に、九月二十七日、突如、本教寺住職佐藤慈暢師が、工事続行禁止等仮処分の提訴に及んだ。裁判は、五回の審尋が開かれた後、先方は敗色濃厚を悟り、判決前の十二月六日に、一方的に訴訟の取り下げに及んだ。仮処分の裁判は、実質当方の全面勝訴となった。

平成八年五月十二日、修復落慶法要並びに、第二十六回法華講総会が行われた。

平成十三年五月二十日、第二十五回全国大会が、南近畿教区の当番で、奈良の百年開館で開催された。

これには、初回の「日蓮聖人の世界展」が開催され、菅野住職が中心となって、ビデオの作成や図録の作成と、会場展示物の飾付が行なわれた。特に図録の作成には、多くの御僧侶の協力を頂いたが、興風談所の協力、特に池田令道師が尽力されて、僧侶方が初めて刊行する図録の作成をされたと思いましたが、本場に立派な図録が出来上がりました。

展覧会も成功して、日本各地で「日蓮聖人の世界展」が開催されました。

またこの時に、「御書システム」が紹介されました。特筆すべきは、その後一般に公開されて、誰でも自由に、自分のパソコンで御書を読むことができるようになったことです。

今は多くの人に活用され、特に御僧侶方の御書の研鑽に活用されています。

菅野憲道師は、昨年十月に、日蓮正宗に多大な寄与をされた荒木清勇氏を題材とした『忘れられた総講師―荒木清勇居士略伝』を発刊されました。

今年一月の『恵日』は、通巻三百号となりました。菅野憲道師は、常に私たちの信心向上に努めてくださっております。

今年の源立寺総会は、記念すべき第五十回総会です。皆様方が、日蓮大聖人の仏法を信心して本当に良かったと思える様、お互いに頑張りましょう。



## 遠い日の思い出

槻木地区 山田 昌



五歳の頃の山田さん

源立寺に私が初めてお参りした日は、遠い昔になってしまいましたが、おぼえているのは、今の池田商工会議所の裏に、冷泉の湧いている広い運動場があり、校舎の一階に池田幼稚園があり、そこに通っていた頃のことです。

お寺の前の道路が広くなり、コンクリートが張られて、むしろが一杯張られていました。そのむしろの上を父の自転車、前に私が、後ろに母と妹が荷台に乗って走って、お寺へお参りしたのをおぼえています。

お寺には、それから月参り、春秋のお彼岸、お会式等、大きな行事の時はほとんど家族そろって、店を閉めてお参りしました。お寺では読経の時には、よく本家のおじいさんと私の祖父が「太鼓」をたたいていました。

庭の八重桜が、春には花がきれいで、読経の後で机を並べて、皆集まって座り、座っている人を見るほとんどの人が親戚で顔見知りの人ばかり、本家のおばさんや新田さん、和田さんのおばさんや母が、食事の用意をして、美しい桜を見ながら、誰々ちゃん、おじちゃん、おばちゃんと呼び合って、春の一日を楽しく過ごしました。

お寺の前の路地を入ると、まだ田んぼで田植えがしてあり、町の中でも田んぼがありました。「栄町」と言わず、「田中町」でした。間もなく池田町は池田市になり、田中町は栄町にと発展していきました。

しかし、それと同じくして、支那事変が起こり、世の中も随



現本堂の建築風景（昭和36）

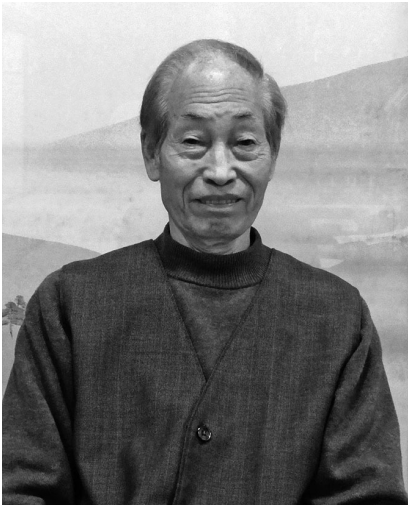
分様変わりして、「武運長久」の旗がひらめき、雲行きがだんだんと変わり、楽しかった子供にとつてのお寺参りもなくなり、戦争の渦に巻き込まれていきました。

私も、今年は九十歳になり、忘れることも多くなつていく中で、子供の頃のお寺参りは、父母とともに心安まる、とても楽しいものでした。

今一度、昔を振り返って……、思い出して……、その思い出を乱筆乱文でしたためました。

### 源立寺法華講第五十回記念総会に寄せて

豊能地区 松井照雄



松井照雄さん

講中の皆様、この度は御目出度う御座います。突然の御あいさつに驚かれるかも知れませんが、実は今回の法華講総会で、五十回目の総会を迎える事になり、

記念総会と名付けて開催されます。

そこで、話題は第一回目と言う事になります。私も(筆記者)まだ若いころでしたが必死に記憶をたどり思い出しますと、現源立寺本堂の右側奥の部屋(客間)で有志が集まり、ワイワイガヤガヤと、総会とは名ばかりの会合がありましたのを覚えております。

その当時の指導教師、つまり御尊師は高玉御尊師で、その後向島御尊師、その後現御住職菅野御尊師が着任されて、現在に至っております。

もう五十年、まだ五十年と、人に依り取り方はマチマチですが、確かに半世紀は過ぎました。その間には、当初のころは有望な人材がたくさんおられました。ある人はお寺の行事を支え、ある人は講の活動に活躍されました。又寺外の研修活動も多くありました。とにかく人が動く度にお世話する方々がおられて、しっかりと活動されていたのも、今は懐かしい限りです。

昔も今も、総会是我々講員にとつて、一年に一回の最も大事な行事と位置付けて頑張つて参りたいと思います。

現菅野御住職の初回の源立寺法華講入講式は、池田市立文化会館アゼリヤホールで行なわれました。それ以後は、連綿と源立寺本堂で講員の中心行事として開催されて参りました。

私事になりますが、目をとじて昔の事を思い出しておりますと、実に色々な人がおられました。その中には講を支えて来られた人、又色々な部所を守つて来られた人々と、多士済々でした。皆様も五十年位昔を振り返つて思い出されますと、友人・知人・故人の方々と、貴方様の人生の一部に参加してくれた人々がおありでしょう……。とにかく、皆様と共に第五十回目的



法華講総会は、前向島ご住職の代から連綿と続けられている(昭和53)

記念総会を迎えることになりました。今回の総会を盛大かつ無事に終える事を祈りつつ、気の早い我々は次ぎの折り目七十五回、百回記念へと思う方がおられても、残念ながら夢に終わるでしょう。

ですから、五十回記念総会は盛大に心の中でも迎えたものです。総会は講員全員で行う大事な行事ですので、頑張つて後世に継いで行きましょう。

## 業論

豊能地区  
武政佳且



武政佳且さん

※生涯の行為  
が死で裁かれる

人間は、死の

瞬間、生涯にな

した行為を全部、

ちようどビデオ

テープを見るよ

うに思い出すと

いいです。

もし地獄の苦

悩の体験ばかり

、まさに死の瞬間、

だとすると、それこそ、自分の生涯の行為が、その生命を責めさいなむことになるわけです。

また、多くの臨死体験から推測すると、生前の行為が、死後の生命状態をも決定するというんです。

誕生時に、すでに人間には、いろいろな差別がつきまとい、先天的な素質や体質も違うし、家庭や社会環境も一人一人違うわけです。ある人が、なぜ特定の社会の特定の家に生まれるのかということも、その人の過去世からの業報、つまり、

宿業と考えられます。

### ※生命の内奥解明した業論

西洋の心理学者フロイト以来、深層心理への解明が始まりました。人間心理の内面が随分明らかになってきました。

その結果、心的宇宙ともいえるべき人間生命の内奥にあるエネルギーが、いかに巨大なものであるかに目を見張ることになりました。では、人間の内面に秘められた善悪の潜在エネルギーはどのようなにして蓄積されることになったのか、という疑問に直面します。

修行の見事な解答が業論であるというわけです。

### ※潜在的力が蓄積されるメカニズムとは

大別すると、三業に分かれます

身、口、意の三業ですが、業とは梵語のカルマの訳で、その意味は「行為」ということです。一般に行為というと身体的行動を中心を考えるんですが、行為、つまり業を、要素に分析しますと、次の三つになります。

最初に、まず、心のなかで、善悪の意思が働くことです。第二には、意思決定の後に起きる実際の行動を指します。そして第三に、意思の発動や行動の結果が、生命の内部に潜在的な力を残すこととなります。この場合、善悪の意思が意業です。それが実際の行動となって外面に現れる時、身体で営まれる行為が身業です。口で営まれる行為、つまり言語活動が口業です。

こうして、業は身口意の三業にわたります。

### ※残された潜在力は業種子

業の第三の要素である潜在力というのは、「表面に見えない

業」「業が身体に刻印される」、または、業種子と表現されます。業種子とは、植物の種子に譬えています。

業種子は、果実の中にあるときも土の中にあるときも姿を現さない。しかし、種子があるから、植物は四季の流転とともに何度でも芽がふき、花を咲かせ、果を実らせるわけです。

この概念が生命のなかの潜在エネルギーを種子と表現するようになったのです。

善悪の潜在力を特に、業種子といっています。

※内在の業は縁により顕在

あらゆる行為は、ちやうど植物の種子のように、その影響性を必ず潜在的エネルギーとして、生命のなかに残して行くという事です。

※そのエネルギー、つまり業の力は、時間の経過とともに減少することはあるか？

この場合、生命内在の業は、業因であり、また業力でもあります。その潜在エネルギーが、縁によつて外に現れ、業の果報を生命に与えるのです。ちやうど植物の種子が、日光や水によつて芽を出し、花開くのと同じです。

※業因は、具体的に生命のどのような領域にあるか

九識論によると、生命の内層を掘り下げて表面の意識（六識）から末那識（七識）、阿頼耶識（八識）と深まっています。最後に九識心王真如の都という根源の大生命にまで至る哲理です。（眼耳鼻舌身意を六識↓六根ともいう。）

煩惱や善悪の心作用の渦巻く領域が末那識（七識）です。そして、善悪の業が潜在力として貯えられる領域こそ阿頼耶識な

のです。阿頼耶識とは、「蔵めること」、「貯えること」の意味です。第八識は、あらゆる存在を潜在態、すなわち種子として貯蔵していますから、一切種子蔵ともいいます。

業種子も、ここに蔵されています。

また、この阿頼耶識は、個的生命的の輪廻の主体ともなります。死に際しては、すべての存在が、種子として第八識の中に潜在化してしまう。そして、生るときには、種子が顕在化してしまいます。すべての存在が顕現態になることが生です。その時、第八識のなかの業種子が発動しますが、例えば、人間生命という自己の基体を生み出す業を引業といいます。そのうえに美醜、苦楽、幸不幸等の色づけをする業を満業といいます。

引業……

満業……

※我見ながら最期に一言

一切の人々には九識心王真如の都といわれる宝珠を生命のなかに持っています。

この宝珠をみがけばみがくほど、その人は最高の幸福境界が得られるということです。悲しいかな、これがあなたの宝珠です、一生懸命がきましょうといわれても、なかなかできないものなのです。

これは時期が来るまで待つほかにないからです。……この後、定業、不定業、順現法受業、順次生受業、順後次受業と続きます。

一九七九年十一月三十日

緑が丘在住 武政佳且

## 私の中の法華経信仰を振り返って

兵庫地区 針本登代子



針本登代子さん

記念すべきの年に、源立寺で、菅野ご住職を始め、大谷御導師や皆さんと一緒に祝い事が出来る事に幸福感を感じており、とても感謝

をしています。

私は、平成十年九月二十日、源立寺で御授戒を受けました。入信してから、二十年が過ぎましたが、日々多忙のため、地区役員の仕事も、お寺の行事も他の役員の方にお願ひする事も多く、まだまだ信心が足りないのを実感しており、反省ばかりです。

源立寺との出会いは、いとこに連れてこられたからです。そのころ私は、職場でいじめにあっていたりで悩みの日々で、暗い、つらい毎日でした。

そんな私を救って頂いたのが、菅野ご住職のお導きでした。

私は「なぎなた」を四十数年続けておりますが、今まで、苦しい時、つらい時がかなり続き、何度も全てを投げ出して、新しい生き方をしたいと思つたか知れませんが、そのたびに、源立寺に来て菅野ご住職のお話を聞き、もう一度頑張ってみようと思ひなおしました。

そして、大聖人様の教えに導かれながら、「なぎなた」界の人達に羨ましく思われる程に、次々と好転し、今に至っております。

現在は、落ちついた心で毎日の生活を過ごすことが出来ていると感謝の気持ちで一杯です。

何時も、不思議に思う事は、今は亡き恩師や、恩師をサポートしてきた先生方、先輩や同僚、全て亡くなりましたが、その方々が残された教室や、お弟子さん等、結局は私が面倒を見なければならなくなり、大変ですが頑張っています。

これも、大聖人様の教えを、菅野ご住職が、正しく私達に伝えて下さったお陰である事を実感しております。このご恩を忘れずに、今までの事は、人生の歩みの助走であり、これからが、本当の歩みだと思つて、「正しい信仰」を菅野御住職に導いて頂きながら、学んだことを「なぎなた」に生かしていける様に、心して歩みたいと思つています。

「人には必ず二つの天、影の如くにそひて候。所謂一をば同生天と云い、二をば同名天と申す。左右の肩にそひて人を守護すれば、失なき者をば天もあやまつ事なし。況や善人におひてをや」

を心強く、信じて歩んで行きたいと思ひます。

「法華經の法門をきくにつけて、なをなを信心を上げむを、まことの道心者とは申すなり。天台云く『從藍而青』云云。此の釈の心は、あいは葉のときよりも、なをそむればよいよあをし。法華經はあいのごとし、修行のふかきはいよいよあをきのごとし。」  
に導かれながら。

## 今の私に出来ること

北摂地区 細川美恵



細川美恵さん

私は、どうしてもこんなにお寺に足を運びたくなるのだからか、と考えました。

源立寺のご住職の講話が素晴らしいかといえ

ば、心と頭が浄化されるように感じます。魂そのものが清められる感じがするのです。

それは、日蓮大聖人様の仏法の正しさを感じ、ただ南無妙法蓮華經と唱えることの幸せを感じるからでしょうか。

ご住職の講話の中に、宇宙の真理そのものが、日蓮大聖人様の教えであるように感じます。そのご指導を学ぶ時、何事があったても手のひらの中で守られていることを感じます。すべてでは自分の心の鏡であり、そして、自分の心そのものが宇宙に繋がっているということです。

私は、今感じるのは、どのように生きていくべきかということとで、そのことを考えました。

そして、日蓮大聖人様の教えをご指導いただいている私たちは、立ち振る舞い、姿勢、仕草、笑顔、言葉で、この世の中の人たちを照らして、元気にしてあげること、自分の個性を大切にしながら、ありのまま、こびることなく、有頂天にならず、落ち込まず、人と仲良く助け合っていくこと、思いやって、平和を作っていくこと、それらが今の私がしていかなければいけないことなのでは、と思っています。

微力すぎる力ではありますが、それでもこの志を強く持ち、日蓮大聖人様の教えを流布し、伝え、法灯相續できるように、精進して参りたいと思っています。

今、四十代、三十代の方は、忙しいのは大変よくわかります。それでも、月一回だけでも、お寺に足を運んでみませんか。世界観が変わると思います。生きることの素晴らしさも、大切さも感じられると思います。自分は、こんなにも沢山のものに支えられているんだとわかり、淋しさもなくなります。

一度、ゆっくり自分の本当の心を知り、日蓮大聖人様のお心にふれて欲しいと思っています。

お互いが、素晴らしいご縁で繋がりますように。

## たゆむ心なく唱題を

北摂地区 津村尤子



津村尤子さん

幸ひなる御縁により、源立寺講中の一員に名を連ねさせていだいて以来、早くも四十年という歳月が流れました。

これより遡りますこと数年、

已に入信しておりました弟の勧めもあり、学会を介し御本尊様を頂戴いたしました。思いもよらず家族の大反対に直面することとなりました。

それは、驚くほどの理不尽な謗言には途方に暮れましたが、その一方では、強い反対に却って心の中では反発を感じておりました。

空虚なぬるま湯のような日々。心に底では何らかの支えを求めていた様でした。御書には、

「過去の因を知らんと欲せば、其の現在の果を見よ。」（全

集二二二頁）

と。

お恥ずかしいことに、私は大謗法の宗教を生業とする家系に育ちました。心の財を持ち合わせず、「毒氣深入 失本心故」の経文は、私自身の姿でありました。過去世よりの謗法の罪障深く、仏法の因果はきびしく、反対されますことは、必然の理であることを後々に学ばせていただきました。

値ひ難き仏法との出会ひに加え、正信への御指導を賜ります得がたき手続の師のもとで、未熟ながら信心を続けさせていだいて参りました。

「只南無妙法蓮華経とだにも唱へ奉らば滅せぬ罪や有るべき、来らぬ福や有るべき。真実なり甚深なり。」（全集四九七頁）と、ありがたくも仰せ下さっております。

罪障消滅への長い長い道のりでもありました。マイナスを背負つてのスタートでありましたが、今ようやくやくにして、皆々様の背中を捉えることが出来たような気がしております。

尚、お陰をもちまして、家族変化がありましたことは申すには及びません。これこそ御本尊様の莫大なる功力によるものであり、仏様の思し召しであるとの確信を得るに至りました。

「法華経を信ずる人は冬の」とし。冬は必ず春となる。」（全集一一五三頁）

大聖人様の大慈悲に包まれ、暗いトンネルを抜け出ることのできる景色にも似たものを憶えております。

大聖人様の仰せの「春」とは、衣食住が満ち足りている状況を指すのではないことを、御生涯を通し、身をもってお示し下



布江幾代子さん

年末、我が家の食品庫の整理を始めました。次々に賞味期限切れの食品が出てきました。「ワアー、こんなに沢山食品ロスをしてしまつて、どうしよう。

## 今、思うこと

北摂地区 布江幾代子

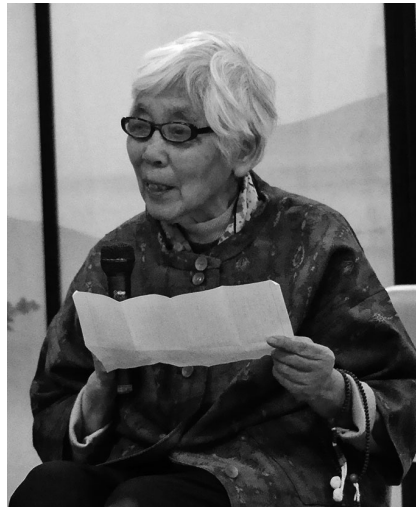
さいました。  
甚だ老齢の身となりました。長きにわたり、ご住職様より御講話を拝聴致して参りましたが、誠にこの上もなく幸せな時間でありました。  
また、大勢の方々の御力添えにより、今日の日があることに併せて、謝意を申し述べたく存じます。  
ありがとうございます。  
残された日々は、たゆむ心なく唱題を重ね、罪障消滅に、生命の浄化に、精進して参ります。

もったいないことをしてしまつた。」  
数日間、後悔と反省の毎日を過ごしました。  
最近、熱い心と無私の心をもつたお二人の偉人に感動しました。緒方貞子さん、中村哲さんです。  
お二人の心の根底には、共通した考えを持つておられたように思います。  
『アフガニスタンの人々が一人でも多く生きてほしい』と願  
い、まず、食料支援を第一に考えられたのでしよう。  
現在の日本人は贅沢に慣れ、そのグルメ嗜好状態を見て、私は恐ろしくなってきました。食べられない方々を思うと、私たちの欲望を減らすことは、できると思います。  
「少欲知足」の精神が、必要ではないかと思うのです。  
これからは、経済の発展ばかりを考えず、心の教育に力を入れていかなければならないと思います。  
子どもたちは親の恩は勿論、衣食住、自然界までの恩を受けて生きていることを、しっかり受け止め、また多くの人たちにも助けられて生きているのだという自覚が必要です。  
利他の心を持ち、人のために尽くすことにより、自分も幸せになつていくのだと、理解しなければなりません。私自身も再確認し、しっかりとお題目を唱え、生涯修行と心得て、正しい振る舞いをしていこうと思つていきます。



## 『恵日』を心の支えとして

北摂地区 坂口久子



坂口久子さん

朝夕の勤行の後に、『御書日訓』を拝読していますが、特に、「天晴れぬれば地明らかなり、法華を識る者は世法を得べきか。」（全集二五四頁）

を拝読すると、身が引き締まる思いがいたします。

私は、難しいことはわかりませんが、と決めつけているので申し訳なく思っています。いつも『恵日』を拝読しますと、ご住職が私たちにいろいろと教えてくださっています。

ある時の、生命は永遠であるとの趣旨の法話で、

「仏法は人生の乗り物です。我われが法華経の信心によって行ずる仏道というのは、人生の最良のありがたい乗り物です。自分の人生の行き先が、そういう六道にはないことを、常に確認していくことが大切と思うことです。額のところに

「成仏道行」と書く必要はありませんが、どうかそれぐらいのつもりで、自分の人生に責任をもって精進してもらいたい。」とありましたが、この法話をいつも心にとめて過ごしていきたいと思っている毎日です。

入院している時は、手元に『恵日』がないと気持ちが落ち着きませんでしたので、神戸の方に郵送していただきました。ありがとうございます。これからは、お題目を唱え、『恵日』を心の支えとして、人生を過ごしていきたいと思っています。

## 法灯相続が望み

大阪地区 沼波博子

信心を始め、ご本尊様をお受けして以来、この大聖人様の信心を、何とか法灯相続したいというのが、私の唯一の望みでした。

今現在は、加齢と共に目の病が進み、視力が低下して歩行も困難になってきましたので、お寺へも思うように足が運べずにいたのですが、仕事が休みの時は息子が同行してくれて、一緒に参詣出来るようになり嬉しく思っております。

今年のお正月も、元日には息子とお参りができ、また、娘も主人が信心をしておりますが、三が日のうちに一人で詣ってきたとのことでした。

私の夫も、生前は入信はしておりませんが、臨終間近



沼波博子さん

になり、葬儀はどうしますかと尋ねたところ、送るのは「おまえに任す」とのことでした。

そして、臨終に際しては、夫の耳元で、お題目を唱え、安らかに眠るよう最後に迎え、葬儀は日蓮正宗

で送らせてもらうことができ、とても嬉しく思っております。

最近、息子と娘を見ていますと、「信じる」という心は、私よりも篤いように感じる事が多々あり、法灯相続の一分でも出来たように感じられ、大変嬉しくよろこんでおります。

これから先、いつまで源立寺にお詣りできるかわかりませんが、気持ちを強く持つてできるだけ精進してまいります。

(代筆・井上真理一言……頑張っておられる沼波様のお姿を、いつも信心の糧にさせていただいております。)



# お母さんの詩

大阪地区 乾美津子

にイジセエそん じゅうさんまい

え？ なに？ なに？

びっくりして 目がさめる

明け方…… まだ 外は暗い

ああ…… お母さんの囁語うわごとか寝言か

驚いた！

母は補聴器をはずすと大声になる

最近 めっきり 寝言がふえたね お母さん

でも 起きたら 全然 覚えていない

え？ 知らーん。 そんなん言うてた？

「私が死ぬ時は 大聖人様が

お迎えに来てくれはるから

全然 こわないねん」

これは母の口癖

大聖人様、来はったかと思つた

と言うと 嬉しそうに笑っている

たまに泣いている時もある

「フェーン」と心細そうな声だ

あたしとケンカでもしているのかな？

「うつふつふ…… ムニヤモニヤ……」

笑っている なんだか楽しそう

亡くなった 父とでも 話しているんだらうか？

聞いてみた

「夢にお父ちゃんはいっこも出てきた  
ことない」

へええ。そうなんだ……

このあいだは、亡くなったお寺の人た  
ちと

みんなで しゃべったそうなの

「どんなことしゃべったのか……」

忘れてしもた……」と目を閉じる

最近 すぐ忘れてしまう

「アカンわ……」

ほら！ お母さん

「アカンわ」って言ったら罰金だよ！

ハイ！ 10円！ と手を出す



「せやったかいなア」

と笑ってごまかす

そのへんは まだ ちゃっかりしてるんやね

今日はお講だ。

あたしは 婦人部だから 早く行くね

一時から 始まるから その時間

心合わせて 仏前に すわってね

と、紙に書いてゆく

「わかった ありがとう」

と、何度も読んでいる

ありがとうは こっちなのになア

今まで 苦労や 心配かけてばかりだ

ったのに

ごめんね お母さん

と 心の中で つぶやく

母の寝顔をじつと見る

92年分の しわがある

髪も白くなった

あれ？ こんなところにホクロあったっけ？

学会 草創期を 走り抜けてきた母

ひたすらに 活動していた

あたしたち 子供は

そんな母の うしろ姿ばかり見ていた気もする

今、こうして

赤ん坊のように 眠る母

がんばったネ

そおつと 頭をなでる

「今が一番 幸せや」

と母は 言う

そうだね お母さん

こんなボケとツツコミの

おもしろくて おだやかな 一日、一日を

大切に してゆこう

耳なんか聞こえなくても 大丈夫！

笑顔で いこう！

あたしが笑う

「何、笑ろてンノン？」

と 母も 笑う

これからも 一緒に

御本尊様と 母と 私と。

いつも 一緒に。

# 猫は地震を予知する

豊能地区 宮崎和子



宮崎和子さん

二〇一一年三

月二日の朝、近

所の野良猫のミ

コちゃんが、山

本さんのお宅の

前で死にました。

この猫は、隣

の清水さんが、

餌をやってくれ

ていました。こ

のミコちゃんが私たちの所に来て、十五年位になっていました。

ある日、私の家の小さな庭にやって来て、ニャーと鳴いていま

した。

最初の頃は気が付きませんでした、三男が古本市で手に入

れてきてくれた、大正関東大震災の時の様子を掲載していたそ

の本に、猫が地震の予知をする、ということが書かれていたの

を思い出して、猫が鳴いた時写真を撮って世界で発生した、M

六クラス以上の大地震を完璧に予知していました。

人間と猫は言葉が通じないため、〇八年頃から道の真ん中位

でひっくり返る動作をするようになりました。

二月二十二日のニュージーランドの大地震の前日に、ひっくり返りました。この猫の写真が数百枚あります。

私はこれを参考として、東京大学、京都大学、人と未来防災センター等、行政や政府にも発信してきて十数年になりましたが、一度も返事が無く無視されて来たのです。

ある学者の先生が、国から膨大な研究の為の補助金が出るから、認めないと新聞に掲載されていた事を覚えています。何時まで経っても認めないため学者の人が、認める証拠の写真を撮ろうと思い、この私の考えに参加してくれたのがミコちゃんでした。

死んだミコちゃんを、ごみ袋に入れてくれていましたが、こんな偉大な猫を袋に入れては申し訳ない、箱に入れてやらねばと死体をとりに来た人が言ってくれました。清水さんが箱を持ってきて、その中に庭にあった樅の枝と花を入れて、持って帰ってもらいました。この事は市役所の秘書課に電話しましたが、いつもの通り無視されました。

和歌山の駅長にされた猫のタマは、なんと幸せな猫でしょう。それに比べて野良猫のミコちゃんは、人類の為に猫は地震の予知ができる事を証明して死んで行ったのです。このことを多くの人々が知ってくださいれば幸いです。



阪神淡路大震災時の源立寺本堂修復工事（平成7.4）

# 感謝

大阪地区  
井上真理



井上真理さん

平成二十六年、有志三人でご住職様に、佐渡へ御供させて欲しい、とお願いしましたところ、では、「開目抄」を認められた二月に行きましよう、と快諾して

いただきました。

冬の日本海は荒れることで有名でしたので、海が穏やかであることを祈りつつ、海路を佐渡へ向かい、無事に佐渡へ到着することが出来ました。ご住職に、佐渡の大聖人様流罪のあちらこちらを案内していただいたことが、今も懐かしく思い出されます。

そして、ちょうどその年の夏に、森（秀之）副講頭より、佐渡の世尊寺にて、八月一日にお虫払いが行われるので、ご一緒にどうですか、と誘っていただき、行く機会に恵まれました。

その年の世尊寺のお虫払い（一日）は、土曜の休日というところもあり、源立寺前執事の成田詳道師も参加されました。三人が合流し、そして、当時、佐渡の地で一人「佐渡日蓮研究会」をされていましたが、大黒喜道師のお取り計らいで、世尊寺のお虫払いをはじめ、妙宣寺、本光寺、妙照寺、本行寺等を案内していただきましたが、さすがに佐渡の地では、どこのお寺も、みな心よく本堂や宝物殿に上がらせていただき、宝物の御本尊様へのお目通りが叶い、とても充実した二日間を送らせてもらうことが出来ました。

翌二日、成田師と森さんは、夕刻、各々帰路につかれましたが、私は、ちょうど夏休みを取っていましたので、残り三日ほどを観光を兼ねて一人旅と思っておりましたが、大黒先生より、「まだ佐渡に滞在しているのですね」

と尋ねていただき、一応、

「一人で大丈夫です」

と申し上げましたものの、

「私は、佐渡では誰ともしゃべることもないので、たまにはいいでしょう」

と、気を遣っていたいただきましたので、厚かましくもその言葉に甘えさせていただき、島中を巡りながら、説明していただきました。

帰阪してすぐに、すでに出来上がっていました『佐渡日蓮研究』の創刊号を送っていただき、その後も二号、七号を送っていただき、そして、二十九年四月には八号を頂戴しました。自宅の郵便受けに入っていた時は、とても嬉しく、胸はずむ思い

で一氣に読んでおりました。

その大黒先生からの便りが、二十九年末から明けたお正月にかけて無く、こちらからお送りした便も届かないようでしたので、何かあったのかと案じておりましたところ、二月に届いたお便りには、急性白血病との報。あまりの驚きに、何の想像も出来ず、心の整理もつかない日々を送っていたのですが、三十年四月七日に第九号が送られて来ましたので、病状も良くなった。のでは、と思っております。

四月二十五日着でいただいたハガキに、

「下種三宝尊のご加護を頂きながら何とか日々、迫害をしのいで療養しています。十号がお届けできればと念願しています。」

との文を最期に、三十年七月十一日、靈山浄土へと旅立たれました。

以前、便りの中に十号までは頑張つて完成させたい、とあつたのを思い出し、やはりご病気で叶わなかったんだと、ご無念を想像していたのですが、亡くなられて間もない七月十九日、興風談所の池田令道ご尊師より、

「喜道師が病中にて精魂をかたむけ、随時執筆されました『佐渡日蓮研究』第十号（六巻抄、当家三衣抄第六）の現代

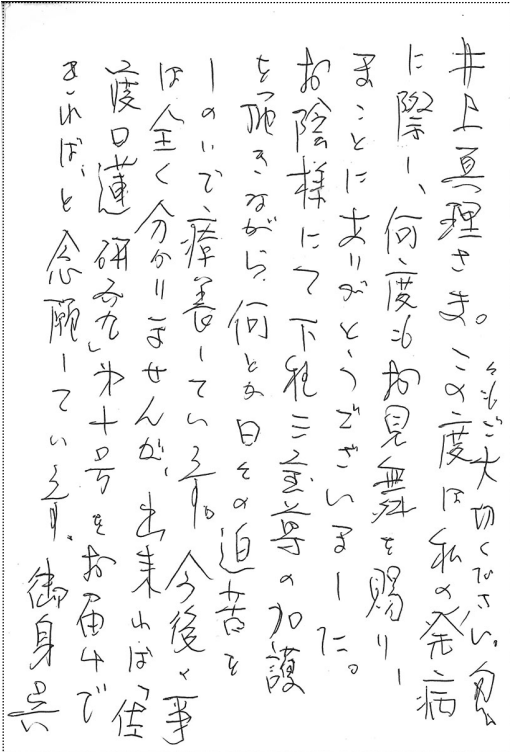
語訳を完遂させるなど、第十号には、師の並々ならぬ思いが込められています。……」

とのご文を添えて、送つていただきました。

生前、大黒先生より、浅学非才な私に、「四信五品抄」を勉強するよう、宿題をもらつております。一・二度しか拝読しておりませんが、残りの人生、「四信五品抄」、「佐渡日蓮研究」（開目抄、報恩抄、六巻抄）等を読み直し、ご恩に報いることが出来そうです。

先日、菅野ご住職より、日興門流が正しいかどうかは、信じる心と、勉強しないとわからない、とのご指導がありました。

この投稿をするに当たり、筆を執るたび、大黒先生が病床において、最後の力を振り絞つて完成させられたことを思いますと、涙が溢れ、幾度



大黒師からの最後の葉書（4/25日付）

も筆が中断してしまいました。

「受け難き人身を受け値ひ難き仏法（御本尊様）に」巡り会い、今世に立派なご住職、大黒喜道御尊師、また他寺院のご僧侶方にお目にかかることができ、ご指導いただけたことは、言葉に出来ないほどのこの上ない喜びです。

これからも、信心不退転、日々精進を重ねてまいります。感謝。

## 第五十回の記念総会を迎えて

北摂地区 北森京子



北森京子さん

私は、源立寺法華講に入講させていただきまして、丁度四十年になります。この四十年間もよく信心を何とか続けてこられたものであると思っております。

又導かれて助けて頂きました。私は、自他共に認めるところの真面目人間でも、優等生でもありません。ですから、すべてのかたがたに感謝いたしております。この四十年間の信心の経過を振り返ってみますと、法華經の信心を最後まで貫かれて立派に成仏をとげられた方、又、他寺に移られた方、信心そのものに疑問を持ち、不信や人間関係に嫌気をさしてやめた方々など、多々お見受けしました。

この四十年間、いつも私が思い続けていることで、大聖人様ご自身常に述べられている言葉に、「日蓮は法華經の行者にあ

らざるか」と疑問を呈し、「イヤ、そうではないのである」と、常々打ち消しておられることです。次々と打ち続く法難には、命を狙われ、悔し涙を流し、襲撃され、怪我し、血を流されたことも、数知れずありました。

大聖人様は、鎌倉時代と今の現代の状況を、仏界からご覧になっておられて、どう思われているのでしょうか。次々と襲う大地震、大型台風、大津波が絶え間なく発生しており、今年早々には、新型コロナウイルスが大流行して、猛威を振るっております。天変地災が次から次へと起こり、地獄のような有様がテレビの中から見られます。「立正安国論」の予言的の中です。

「世皆正に背き人悉く悪に帰す。故に善神は国を捨てて相去り、聖人所を辞して還らず。是れを以て魔来たり鬼来たり災起こり難起こる。言はずんばあるべからず、恐れずんばあるべからず。……」（全集一七頁）

これまでの謗法の総決算である。今までの宗史の経過を考えて見る時、創価学会による本山乗っ取りを未然に防ぐ事が出来たのは、菅野ご住職を始めとする正信会の多くのご僧侶たちが、立ち上がって行動を起こしたからであって、故日顕師や早瀬日如師たちの功績ではありません。事実は、非常に重要かつ大切なことと思っております。

詐称している事実に関して、ずっと言い続けていかなければならない義務があります。容認や黙認をしてはならない。口を閉ざしたり、もう既成事実化をしているといつてはならない、そう思います。

今の日本国は、何かがおかしくなり、多方面において亡国の

始まりの様に思えて仕方がありません。亡国に向かわぬことを祈るばかりです。

「大聖人様の魂は、我われと共にある」との自覚が大切になつて行くと思えます。大聖人様は、法華経はすべてを映し出す鏡であると仰せです。過去・現在・未来も罪業もと……。私は現代は監視カメラがすべてのものを映し出すと思つています。監視カメラの設置が必ず将来には正邪を映し出し真実の証明をしてくれると思つております。

正しい信仰の筋道とは、正しい信仰のあり方とは、そういうものではないでしょうか。

## お題目と私

兵庫地区 宇都宮賢明

妙法一筋に生きてきた私には、お題目のことしかありません。源立寺で、先代の御導師から教えていただいた、

「御本尊様と自分」

「食べ物、食べてみないとわからない」

「お酒は飲んでみないと、味がわからない」

この言葉を伺った時、このお方、なんと説得力のあるお方かと思いました。

この時に創価学会をやめました。

それからは、どんな時も（歩いている時も）御本尊様を心に



宇都宮賢明さん

念じ、お題目を唱えて生きております。

平成二十二年に、狭心症でカテーテル手術をした時も、ずっと心の中でお題目を唱えていました。心電図モニターがピーツ

と「0」になったので、院長先生が、

「ああ……、駄目だ（死んだ）」

と思つたのが、私が、

「先生ありがとう御座いました」

と言つたので、院長先生が、

「奇跡の人だ」

と、言つたそうです。

平成二十五年に、二十一針を縫う開腹手術した時も、お題目のおかげで命が助かりました。

道端で倒れて、頭から血を流し、意識不明だった時も、後遺症もなく助けていただきました。

今年八月に、てんかんが起きて、その時に骨折して三ヶ月入院していましたが、ずっと題目を心の中に唱えていました。

今は、足の運動で、妻と二人で一時間ほど花を見たりしながら

ら、リハビリに頑張っています。  
お題目は、本当にすごいと思い、感謝しております。何があ  
つてもお題目です。

本当にありがとうございます。  
南無妙法蓮華經

菅野御尊師 いつまでもお元氣  
で、長生きして下さい。



## 母の命を受け継いで

北摂地区 佐藤千賀子

今年の一月二十四日、私の母は亡くなりました。息を引きと  
る前日からずっと傍で祈ることが出来て寄り添えたことは、今  
から思えば幸せでした。

昨年の八月から食事ができなくなり、出血により大腸癌であ  
ることがわかり、病院で医師に腸閉塞になる心配があると言わ  
れました。母は九十七歳ですので、命がこれからのように維  
持できるのかと不安に思い、お題目を唱え、私は病院に何日も  
通いました。苦しい思いをしてほしくない一心で、私は医師に



佐藤千賀子さん

大腸癌の手術を  
断りました。な  
ぜなら、母はず  
っと信心をして  
おり、生命力が  
強いので腸閉塞  
にはならないと  
信じたからで  
す。

は血圧が下がり点滴治療となり、更に今年になると容態が悪化  
して、見ているのもつらい状態となりました。

たとえ会話が出来なくても、耳は聞こえているのがわかりま  
したので、東京から駆け付けてくれた娘と共に、耳元で応援の  
語りかけをしたり、母の大好きな歌を歌いました。その時、一  
滴の涙が母の頬を伝いました。母は穏やかな顔をしてくれて嬉  
しかったです。

私は、その夜は病室に泊まり、お題目をあげて、ずっと寄り  
添い、母の大好きな歌を歌い続けました。明け方に、母は静か  
に息を引きとりました。死に目に立ち会えたのは忘れることが  
出来ません。あれから一か月、辛い日もありますが、信心して  
いることで、母の笑顔と、一緒に過ごした楽しい日々、母が残  
してくれた家族へのメッセージを思い出し、絶対に成仏してく  
れたんだと、明るい気持ちになります。死が最後ではなく、永遠  
の命として自分の心の中に蘇り、続いているのがわかります。

母は、戦争を経験し、九十七年の命を全うしました。明るく前向きに生きる、命を大切に生きること、私に教えてくれました。私もしつかり信心をして、娘として母の命を受け継いでいきたいと思えます。

最後に、コロナウイルスが感染する危険があるにもかかわらず、祖母への思いを込めて、東京から娘が一歳の孫を連れて、また、はるばるタイのバンコクからも、息子がかけつけてくれ、母の冥福を祈ってくれました。母は喜び、ずっと私たち家族を見守ってくれることでしょう。

法華経を信じる新たな出発の気持ちを込めて、次の御聖訓を掲げたいと思います。

「夫れ浄土と云ふも地獄と云ふも外には候はず。ただ我等がむねの間にあり。これをさとるを仏といふ。これにまよふを凡夫と云ふ。これをさとるは法華経なり。もししからば、法華経をたもちたてまつるものは、地獄即寂光とさとり候ぞ。」（全集一五〇四頁）  
有難うございます。

## 知恩報恩を目指して

北摂地区 宮川力夫

「命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれをのぶるならば千万両の金にもすぎたり」（全集九八六頁）

とのご金言を病院のベッドに臥しながらつらつら考えさせられた。

貴重な命を世に出して頂いて八十三年、はや終活の時期に至ってはいるが、はたして、

「仏弟子は必ず四恩をしつて知恩報恩をいたすべし」（全集一九一頁）



宮川力夫さん

とのご金言に恥じないような行いをしてきただろうか。そう考えるとまだまだ頑張らなければと、我が身を奮い起こさざるを得ないのである。

家内を亡くしてからこの十二年間、二人の子供に見守られながらも一人暮らしを貫き通し、心臓バイパス手術・両脚の動脈硬化手術・右側尿道ガン摘出手術など、最後には身体に水が溜まり心臓が弱まる「うっ血性心不全症」による入院治療と、体はガタガタになってしまったが、まだまだやる事が有ると奮起したのである。

そのためには勤行唱題が第一と心得、入院中も四人一部屋であるが、朝夕、東に向かって黙読し、また退院後も人に気兼ねなく勤行唱題出来る一人身の我が家に籠り、療養を続けているのである。

やがて徐々ではあるが、晴天の日には外歩きが出来るようになり、二月の初めにはお寺に参詣して、久しぶりに皆様にお会出来て、この上ない喜びを感じたしだいです。

もともと考えてみるまでもなく、菅野ご住職がご指導されていた（『恵日』二〇一九年十二月号）、信仰の次元と世俗における存在や所有や歴史の次元とは違い、「その文字をもって図顕された十界互具・一念三千の法体が御本尊である」とを考えると、日々行っている勤行唱題の取り組み方が一段と崇高になって来たのである。

この感覚でこの体に元気を取り戻し、第一に知恩報恩に向けて頑張りたいと願った次第です。

## 月々日々につより給へ

大坂地区 黒木光子

令和二年二月、寒い冬が人一倍身に染み入る季節でございますが、『恵日』二月号の中に、講員の意見・決意・その他、いろいろに、との記事を見て、筆を執りました。

あまりにも世の中が移り変わることに驚くばかり。テレビを見ていても、何かを考えていても、江戸以前と明治が変わったように、明治から大正、昭和に来て、この令和二年はどうなることやら。新型コロナウイルスは疫病なのやら。この後、どのように人々は生きてゆけばいいのやら。



黒木光子さん

一般新聞を見るのもまれですが、新聞紙上には、朝日宇宙フォーラム二〇二〇の基調講演をされた、女性宇宙飛行士で東京理科大学特任副学長の向井千秋

さんの宇宙開発の話が載っていました。世界二〇〇カ国以上あるという数の国の中で、小さな小さな日本国ですが、日本国だけでなく、地球上は病むに病み続けているとのこと。新聞で、美しい地球が写真に収めてあったのを見たのは、何年前だったやら……。

この小さな小さな日本国に、今でも五十万近い外国人が入国しているようですから、家で唱題していても、どんどん外からの変な音響等が入って来て大変なことになっていて、まるで日本潰しにかかっているような感覚に陥ってしまいます。

大聖人様の誕生月も、日本の国の中には流行病が蔓延しています、またその先のオリンピックとか、さらにまた我われの正信会へも影響があつて、前途が危ぶまれるのではないかと危惧しています。

日達上人が、正しく残された正信会です。その源立寺では、三月は各地区の総会がある月です。四月は故郷への旅行ですが、

五月は第五十回の記念の法華講総会ですので、ぜひ参加したいと思っております。

「月々日々につより給へ。すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし。」(全集一一九〇頁)

の一節が、私の好きな御書です。今後共頑張りますので、よろしくお願いいたします。

## 種子を蒔いていけるように

大坂地区 寺川晴美



寺川晴美さん

『恵日』三〇  
○号発刊おめで  
とうございます。

それと『恵日』  
刊行の為に、二  
十五年にも及ぶ  
時間と努力を費  
やしていただい  
た多くの方々に  
は、感謝の気持

ちで一杯です。ありがとうございます。これからも、広いジャンルに亘る仏法を、少しでも理解できるようにしっかりと読ませていただきます。

今年、源立寺法華講総会五十回の節目を迎える年に当たり、『恵日』の記念号が発刊されるので、私も奮起して所感を投稿させていただきます。

平成三年に、私は源立寺に入講させていただき、来年で三十年になります。私にとりましても記念すべき節目となりますので、今年こそは「生活習慣を整えて、充実した日々をつくる」ことを年頭の誓願としました。(いつもその思いを抱くのですが、寒苦鳥の如く上手くいかず凹みます。)

誰でもみんな仏法に護られ、それぞれ欲を持って生きています。私が、私は睡眠欲がとても強く、暇があれば寝るとい生活が、若い頃から続いています。これが私の長年の悪い生活習慣の一つです。近頃、私は時間単位の仕事をしているので、時間はかなり気にして生活しているつもりですが、土・日・祝日は、大体長時間の仕事となり、精神的・肉体的にクタクタ状態で帰宅するので、ひとまず一時間位寝て身体を休めます。

平日は、仕事と仕事の合間をみて寝て過ごすという生活で、これでは時間を気にして生活しているとは、とても言えません。時間の過ごし方は、みんな各々違っていても、一日二十四時間、刻だけは、誰もが否応なく平等に過ぎて行きます。子供の頃は「寝る子は育つ」と言いますが、年をとって寝過ぎると老化が進むを実感しています。

「人には必ず二つの天、影の如くにそひて候」(乙御前御消息)

「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞いにて候けるぞ」(崇峻天皇御書)

法華經に縁して、私の心を強く惹き付け、法華經から離れられなくなった御文です。

朝夕の勤行で、怠け者の私でも護っていたに感謝し、大事な時間を無駄に過ごして、マイナス点を増やしたことを反省します。そして、明日からは軌道修正をします、と懺悔します。

「なにの兵法よりも法華經の兵法をもち給うべし」(「四条金吾殿御返事」)

長い間深い意味を感じ取れず、戦の無いこの時代にこのご文は関係ないと思っていたのですが、十数年経ったある時、戦いの方ではなく、生きるための術で、生きる方法は法華經の教えを用いなさい、と教えて下さっているのだと……、生きていく上で一番大事な御文なのだ、と痛感しました。

「抑も地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば……五尺の身の内に候とみえて候」(「重須殿女房御返事」)

人は、どんな時どんなことも自分自身が決めて発言し、行動し生きているのだから、簡単に物事を自分の基準で判断しては、間違った方向へ行きかねない。だから、しっかり法華經の教えを、正しく深く理解し、ご仏智とご仏眼をいただく必要性を強く感じています。

また、今は次の「王舎城事」の御文が、深く胸に突き刺さっています。

「如法に信じたる様なる人々も、実にはさもなき事とも是れにて見て候」

いつまでも寒苦鳥の如く生きている自分は、大聖人様の教え

を実践しているのか、本当に正しく信じ求めているのか、改めて考えさせられます。心が痛いです。

法華經の教えをしたためて下さった御書をしっかりと読み、その解釈をしていただいている『恵日』を読んで心に刻み付け、朝夕唱える経文も少しは理解できるよう努力しなければ、と思います。

読むのもスロー、理解することもスローな自分なので、この先どれだけ理解し、心に刻むことができるか心配ですが、時間は過ぎすばかりではなく、つくることが大事だと肝に銘じながら、気付かせていただける御文が、ひとつでも多く増えますように精進して参ります。

また、東奔西走され、この正宗を守って下さった荒木清勇氏や、先人たちの正信の道を感じて、次の世代に伝えられるように、そして、少しでも種子を蒔いていけるように、精進して参りたいと思います。

南無妙法蓮華經

## 御本尊様のお導きを信じて

豊能地区 N

この世に生まれ出てすぐに御本尊様とのご縁をいただいた私ではございますが、そのことのありがたさを身にしみて感じられるようになったのは成人してからのことでした。これほどの

年月が経っていても、恥ずかしながら毎日の夜の勤行と毎月の御講に行くことが精一杯で、私の信心は皆様とは比べものにならないほどお粗末なものです。御本尊様がいつもお守り下さっているのだという確信を持ち、毎日を通じていることは本当に幸せなことだと心から思っております。そのように私が何の疑念を抱くこともなく素直にそう信じられるのは、母が、子ども頃より私にいつも言っていて聞かせてくれた色々な言葉のおかげであり、いつの間にか自然にしみ込んでいたからだと思えます。

「真つ直ぐに、正しく生きなさい」「人の目を恐れるのではなく、神仏の目を怖れなさい」「悪いことは絶対にしてはいけません」「嘘をついてはいけません」「人の悪口を言っはけません」「卑怯なことはしてはいけません」「御本尊様は全てご覧になっている」「良いことも悪いことも、したことは全て同生同名天が報告されている」「人には優しく接しなさい」「したことは全て自分に返ってくる(因果応報)」等々。母は私が生まれた時に「御本尊様にいただいた子であるから、信心のできる子に育ててお返ししなければならぬ」との思いで私を育て、この長い年月を私のために生きてきてくれました。本当にありがたいことであり、母にはただただ感謝の念しかありません。

法華講総会記念号が発刊される頃、私の環境はどうなっているのだろうかという思いにかられながら、提出〆切二月末直前の今、やっとパソコン画面に向かっております。

これまでの人生を詳細に書くことは控えさせていただきます

が、私の人生は、友人曰く、その辺のドロドロのテレビドラマなど比べものにならないほど過酷なものであるとのことであり、まさに戦いの日々でございました。そして、それは今も続いており、もしかすると近いうちにいよいよ最終局面を迎えることになるのではないかと予感を抱かせるような出来事に、今なお見舞われている状況です(もちろん、大聖人様のように命を狙われているわけではないので、大聖人様の遭われた法難に比べれば全く取るに足らないことではありますが)。

これまで「もういよいよだめかも・・・」と心身ともに追い詰められる状況に何度も直面しましたが、なんとか乗り越えていくことができました。「何も悪いことをしていないのだから、堂々としていなさい」との母の言葉のとおり振る舞い、そして、御住職様からいただいたアドバイスのお言葉を支えに必死で耐えておりますと、ギリギリのところでのその事態をかわすことができたり、救いの手が差しのべられたり、また、後になつてから「あの時の辛すぎた出来事は、結果として、私にとって良かったのだ」と思えることになっていたりするのです。

母はよく「人間万事塞翁が馬」「禍福は糾あやまえる繩なわの如し」のことわざを口にしますが、本当にそうだなと思えます。ひとえに御本尊様のご加護によって、ここまでやってこられたのだと思えます。

毎日の勤行の後に、昔いただいた二冊の日訓を読むことを習慣としておりますが、特に私の心に響く日訓は次の七つです。

○よからは不思議、わるからは一定とをもへ

○なにの兵法よりも法華経の兵法をもちひ給ふべし

○身の財より心の財第一なり。此の御文を御覧あらんよりは心の財をつませ給ふべし

○善知識に値ふ事をば一眼のかめの浮木に入り、梵天よりいとを下して大地のはりのめに入るにたとへ給へり

○いかなる乞食にはなるとも法華経にきずをつけ給ふべからず。されば同じくはなげきたるけしきなくて、此の状にかきたるがごとく、すこしもへつらはず振舞ひ仰せあるべし。中々へつらふならばあしかりなん

○先づ臨終の事を習ひて後に他事を習ふべし

○教主積尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ

母が幼少より私に言い聞かせてくれた言葉は、日訓の多くの中にありました。今置かれている状況がどう展開していくのかわかりませんし、不安がないというのは嘘になりますが、どのような結果になろうとも、これも私の過去世の因果によって与えられている修行と思ひ、これまで同様、御本尊様を信じ、教えに少しでも近づけるよう、これからも精進して参りたいと思ひます。

## 信心の向上が出来るように

大坂地区 吉正富士子

会社では良い同僚に恵まれ、忙しい仕事の中で毎日が過ぎ去っていきます。



吉正富士子さん

でも、忙しいことは嫌いではなく一人ぼっちの生活を忘れさせてくれます。朝晩、仏壇の掃除と花瓶の水の入れ換えをし、勤行唱題します。ご本尊様に、

健康で過ごさせていたいただいていることの感謝と、ご先祖様の健康やかな日々を願い、両親の供養を心から願っています。

私は、母から信心の大切さと、信仰の行儀を教わりました。

母は、勤行することやお寺の参詣を、決して強要しませんでした。毎日、仏壇の給仕をし、深い悲しみや苦しみの時も勤行を忘れず、先祖の供養を怠りませんでした。

そして、人の悪口を言わず、人を思いやり、前向きな思考で、性格は落ち着いていました。そんな母を、人間としても尊敬し、今も褒めてもらおうと、毎日写真を眺めて話しかけています。

そして、お仏壇に向かうと、毎日たまる心のオリの様なものが払拭できます。

毎月の御講を楽しみに参らせていただき、信徒の皆様とお題目をあげ、また唱題の時の太鼓の響きは、身体をシャッキリとさせてくれます。

「体曲がれば影斜めなり」

とあるように、ご住職様の法話を拝聴して、心を正して影を真つすぐに直し、澄み切った清々しい命を取り戻せた様な気持ちになります。

「深く信心を發して日夜朝暮に又惰らず磨くべし。何様にしてか磨くべき只南妙法蓮華經と唱へたてまつるを是をみかくとは云ふなり」

を、心に注入して帰ります。

今年の元旦丑寅勤行会にお参りした時に、ご住職様から、「目標を立てた時、その目標を達成させない様な魔が忍び寄る」と、法話の冒頭にありました。

私は、どちらかと言えば、ネガティブ思考で、惰性に流され易い弱い性格なので、「ドキッ!」としました。

大聖人様は、

「仏になる道には我慢偏執の心なく南妙法蓮華經と唱えるべき者なり」

と、仰せられています。

この『恵日』記念号に投稿するにあたり、今年の目標を達成すべく、ご住職様の正しい法話を拝聴し、自分の信心が向上出来るように、只々信じて修行を積もうと思ひ定めております。

## 「公と個」についてめぐる思い

〓 仕事歴を振り返りながら

北摂地区 橋本良介



橋本良介さん

※この原稿では、上意下達の「公の秩序」的なものを「タテの公」、当事者主体の「公共の福祉」的なものを「ヨコの公」と呼ぶようにしています。

### 1、「役立たず」の私の生きる資格とは？

二〇一五年、私は六十五歳で定年退職しました。妻がまだ若いので、「働き手」と「しゅふ」を「選手交代」（主婦↓主夫）しました。近年私は病気がちになり、最近では、通院治療費と入院治療費それぞれ高額医療助成を受けても、一ヶ月間の自己負担金がとても高額になってしまふということがありました。その時、こんな調子でいったらどうなる？と思うと不安になるし、妻に申し訳ないしで、思わず、「金食い虫やなあ」とつぶやきました。妻は「(あんたが勤務していた) Aさんたちの支援の仕事は何やったん？ Aさんたちのことをどう思ってたん？」と呆れ、怒り出しました。というのも、私は二十四時間介護の必要な Aさんたち重度障害者の自立生活運動の支援者の仕事を、長年してきたのです。この「自立生活運動」の「自立」とは、重度障害者が「人の力を借りずに自分の力で生きて

いくこと」ではなく、「より多くの人の力を使って、施設ではなく地域の中で自分らしい暮らしを、自分の意思で選び取っていくこと」なのです。Aさんたちは就労も困難で、生活保護制度や公的な介護保障制度を使って地域の賃貸住宅で暮らしておられます。長時間介護が必要ですからヘルパー人件費等かさみます。「税金でそんな暮らしをするより、さっさと施設に入ったらいいのに」という声も聴こえます。Aさんたちは、そのような自立生活を堂々と営んでおられます。で、妻との対話に戻りますが、「(Aさんたちの支援の仕事を) あんたはどういうつもりでやっていたのか？見下ろしていたのか？」というわけです。私はグウの根も出ませんでした。そして、同時に、自身「道」が繰り返されていることに気づきました。

私は二十歳の時にC型肝炎にかかり、以後十年以上にわたって、療養生活を送っていました。自分の「稼ぎ」と言えば学校宿直等の僅かなバイト代だけで、軸は、親掛かりの生活の時期と、生活保護を受けて一人暮らしの時期とがありました。当時、親友Bから「ごく潰し」と言われショックを受けて抗議したことを思い出します。「風来坊」や「ボヘミアン」のように、一種のほめ言葉として言ってくれた「ひとひねり」あつての言葉だったのですが、そうと分かかってはいても、あまりにもリアルに当てはまっていたためギャグと受け流せなかったのです。

その頃のある日、会社寮の管理人をしていた両親の職場を訪ねると、母が、「さつきテレビのニュースで大阪市内のあるビルから若い男が飛び降りたというのがあったん。ふわあと飛び降りたと言うてて、その『ふわあ』というのがあんたみたいやな、

と二人で言うててん」と笑いながら話しました。母なりの、一杯のこの世への引きとめメッセージなのだと受け止めた。

そんな時期を経て、療養十二年目、三十二歳の時に地域の障害者作業所と出会いました。「その他の障害者」として、週二回、半日ずつから通所させてもらうようになりました。三年後、病状の安定化に伴い、その作業所の職員になり、のちには、インターフェロン治療でC型肝炎が完治し、Aさんたちが立ち上げた自立生活センターの支援スタッフになり、六十五歳まで勤めました。

かつて私のことを「ごく潰し」と言ったBは、私が卑屈になりきっていた同時期、「オレみたいな役立たずでも生きててええのか？」と問うと、こう言うてくれました。「ライオンの集団生活では、傷ついて狩りの戦力にならなくなった仲間にも元氣な奴が分け前を渡すらしいで。支え合う事は動物の本能や。お互いに支え合ったらええんや」と……。ひねくれていた私は、(いろんな動物の中には、ライオンとは真逆な残酷な本能の動物もおるやろ)と心の中でつぶやいていましたが、その後障害者の運動に関わっていく上で、このBの言葉は大きな支えになっています。

そして今、私は老いて半世紀近くぶりに再び非生産的存在に……。かつて「ごく潰し」の言に抗議した自らが、自らを「金食い虫」と嘆く生命の繰り返し。成長してないですねえ。

## 2、相模原殺傷事件に思うこと

そんな私にとって、相模原殺傷事件は看過できません。「意

思疎通が出来ない者は、生きていても不幸を生み出すだけだ」

と言つて、重度障害者入所施設の十九人を殺害し、二十六人を傷つけた植松被告。その行為を肯定する人はいなくても、同様の考え（『優生思想』）自体は、昔から根強くあります。かつては、全国各地の公的な行事で、「不良な命が生まれないようにしましょう」のスローガンのもと、地域の名士たちが優生思想を推進する光景が当たり前だったので。私の務めていた作業所のメンバーのお母さんたちからも、舅等から「うちの血筋にはない。嫁のあんたの責任だ」「こんな子は早くあの世へ行つた方が本人のためだ」といった言葉をかけられたと聴いています。生きていることを否定された生。「自ら手を下すか否か」の違いはあれど、考え方の根底には植松被告と同じものが多々あると思います。そして、私自身の心の中にも（おそらく人は皆）、先に書いたような「ライオンの」なホンネと、残酷なホンネとが同居しています。我が内なる植松被告です。

①「清らかなホンネ」と②「汚れたホンネ」。①は、美しいので、長い年月「当然のタテマエ」としてまかり通ってきました。説明の必要もなく安泰でした。しかし水面下では、「タテマエ」のホンネ性は忘れられ、ホンネは②だけという意識が広まってきました。そして今、②が①に襲いかかっています。いろんな鬱憤がたまっている人々は②に共感します。「そうだ。これがホンネだ」。①は、『自明の理』と言うだけでは、説得力がない状況になっています。①が、「大切に守り広めていくべきホンネ」であることを訴え続けていく、その一員であり

たいと思います。

先日（二〇二〇年三月十六日）、植松被告に一番は死刑判決を出しました。私の観た二つの報道の視点は対照的でした。一つは「我々とは異質な人物による身勝手な行為」とするもの。そういう判断のもとに植松被告の死刑を執行し、「異質な者を排除」して一件落着では、何かひっかかります。もう一つは「深いところで同調する声に支えられて行った行為」とするもの。中でも、被告と文通している最首悟さんは、番組インタビューに答えて、「今後も被告との文通を続け、被告が生きている間に、被告自身、自らの信念に疑問を抱く時が来ることが願ひ（私を感じた要旨）」と言っておられました。

植松被告に殺された全員の氏名非公表の報道も衝撃的です。被害者側が名前を隠さないといけないなんて。社会からのいじめが予測されるからだそうです。この社会で生きている人は皆、「家族の中だけの私」ではなく、「公の中の私」であるはずで「公」＝「地域」。殺された十九人の人たちの「地域の中の私」がなかったことになるなんて。「地域の構成員」の立場から「匿名対象者」へ。ご家族の思いは想像も及びませんが、氏名非公表のご決断は苦渋のものだと察せられます。

「地域」という言葉については、障害者支援活動の先輩Cさんの解釈が忘れられません。Cさんは、「地域とは、『場所』を指す言葉ではなく、『関係性』を指す言葉である」と言われました。施設が、単に山奥から街中の場所に下りてきただけでは、そこは「地域」ではない。その街で、行き交う人々と日常的に挨拶を交わしたりして係わり合い、施設の中での職員との係わ

り合いも、互いを人として尊重し合う、その「関係性」こそが「地域」である……と。

現実の施設の、地域の中での「公」は、私がAさんの事業所の「地域移行」事業を通して係っていた頃は、「タテの公」になりがちだったのではないかと思います。施設側の都合と個人の自己決定権の両立は困難でした。起きる時間も食事も入浴もすべて施設側から決められます。外出したいときに外出できません。

たまに介護者が見つかって外出できても、門限は午後四時でした。「当事者の意思」よりも、「介護者の（施設側の）都合」を優先させざるを得なかったのです。

途方もないことですが、施設の利用当事者・運営者・職員の皆さんの不断の努力によって、施設内も、街の人々との係り合いも、「ヨコの公」の「関係性」をどんどん強めていくことが、「匿名対象者」から「地域構成員の一員」復権につながればいいと思います。

近年「公と個」ということをしきりに意識させられます。障害者も高齢者も、昔のように家族だけで抱え込み、時に共倒れするのではなく、社会的な支え合う仕組みの中で生き合うこと（互いに「公」の中の「個」であること）が正論だという共通認識が少しずつ定着しつつあるように思います。そんな中で、先に述べたような重度障害当事者による自立生活運動も進められてきました。Aさんが自立生活を始めた当初は、学生等の人たちがボランティアで介護ローテーションに入って、当事者の生活を二十四時間三六五日支えていました。その際、魅力的な当事者のところはたくさん介護者が集まり、アピールの苦手

な当事者のところは思うように集まりません。Aさんのところはスタッフが少なく介護ローテーションに穴があきがちで、ある時、とうとう三日三晩飲まず食わず垂れ流しという経験をされたそうです。Aさんは、「自分のように魅力の足りない者にも、命を支える介護が保障されるべきだと思った」そうです。

そして、市に、公的ヘルパー派遣を交渉しました。命がけの交渉であることを理解しない担当者に「オレを殺す気か！」と怒鳴る場面もあったそうです。そうしたAさんの粘り強い交渉によって、その市の一ヶ月の公的介護保障時間は飛躍的に伸びて、その市で後に続く当事者に道を切り開きました。Aさんの仲間は全国にいます。「全国自立生活センター協議会」と言います。「自分のことだけを考えていたら脆い。時間数の少ない地域には、みんなで力を合わせて支援し、全国共に生活基盤を強め合っていこう」というのがAさんたちのモットーです。Aさんが「公」の視野で考えたから、Aさんは自分の「個」の生活を勝ち取ることができたのだと思います。

### 3、「タテの公」より「ヨコの公」

二〇一七年三月、国会で教育勅語に関する質疑がありました。「『親に孝』の何が悪い」と、具体的に中身の一部分を示して開き直る稲田防衛大臣（当時）に対し、質問者は具体的な中身で反論せず、「戦後の国会ですでに否定されている」としか言わなかったと記憶しています。具体的に反論するチャンスだったのに。かつて多くの国民が天皇のために命を捧げた、そういうことにならないような平和主義の象徴として、現在の天皇は

おられると受け止めています。教育勅語は「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」、つまるどころ天皇のために命を捧げよと説いて、「親に孝」と「一旦緩急アレバ」は一体不可分な「タテの公」の文脈の中で書かれていますから、現行の象徴天皇主義とは相容れません。

親孝行を心がけ、敬愛し、没後も供養し続けることは私も心がけています。しかし、それを「天皇信仰」の文脈の中にはめ込むことは、戦後日本の「政教分離原則」と相容れません。

森友問題で、総理夫人の関与に関する部分等の公文書改ざんを命じられ、抵抗するも服従させられた公務員・赤木俊夫さんの自殺。常日頃、「僕の契約相手は国民」と言っておられたといえます。無念さは計り知れません。遺書に寄れば、一人で権力に立ち向かう体力も気力もないため、自殺するしか選択肢がなかったとのこと。「公文書は国民の財産」という「ヨコの公」を守ろうとされたことを忘れまいと思います。

約二十年前、某市の委託金が出ている民間ボランティア活動「人権啓発協議会」で、私は地域の中学校の校区部会の役員の一人でした。この年度から副代表になったD夫人。校区の年度総会に向けての役員会でのこと。私「会計報告の準備も進めましょう」、D夫人「なんでそんなことせなアカンの！ たった十万のはしたがねくれたからというて」、私「単にお上に向けて会計報告するんじゃないんです。参加してくれている校区市民の皆さんへの報告が第一です。」、D夫人「そんな必要ない」、私「役員として皆さんへの当然の責任だと思えます。それと、委託金のうちの校区の分は十万と違って二十万ですよ」、

D夫人「え、そうやった？」。予算が実は二十万であったことも知らずに言っておられる。

ここでも、「タテの公」ではなく、「ヨコの公」の意識が問われているのですが、D夫人は、そのことにはまったくお気づきでない。このような人が、このような意識を変えずに「市民活動家」として通用している事に呆然としました。

### 鉄道マンの「ヨコの公」。

二〇〇四年十二月八日（水）、午後二時すぎより、JR名古屋駅前テルミナ七階会議室にて、「誰もが使える交通機関を求める全国行動愛知実行委員会」とJR東海との協議に、Aさんの団体の一員として参加しました。これは、その十年ほど前から毎年一回行なわれてきた交通のバリアフリー化をめざすものでした。

この日、どの要望項目に対しても、JR東海側出席者からは「この場ではお答えしかねます」などの発言が目立ちました。責任ある立場の人は出てこず、交渉の対応は権限のない人たちにさせています。そのため約十年、毎年ほとんど同じやり取りに終始していたそうです。実行委員会側は、JR東海にバリアフリーに関する対策の責任を持つ専門部署がないことを大きな問題として指摘しました。

最後に、愛知実行委員会のEさんが、「バリアフリーの対策課を作って利用者と共同して取り組んで行きませんか。我々は利用側の専門家として協力を惜しみません。あなたがたが年老いた時、障害を持つかもしれないし持たないかもしれない。だが、確実に身体能力は落ちます。落ちた時に、自分はJR東海

に勤めてよかったと思える仕事を残してください。鉄道マンとして恥ずかしくない仕事、悔いを残さない仕事をしてください。そのためには、我々は全身全霊で協力します。我々の知識や経験を生かしてください。今日は十人ほどの人数ですが、我々は何百、何千という人たちの代表です。我々の背後にもっとたくさんさんの声があることを忘れないでください。」と言って、終わりました。私は、このEさんの言葉に、「ヨコの公」の極みを感じました。

この協議の約半年後（二〇〇五年四月二十五日）、JR西日本の福知山線で大きな脱線事故が起きました。当時、JR西日本が会社の目標のトップに「利益」を掲げていて、「安全」を二番目に置いていたことが、事故が起きて初めて、私たち利用者にも明らかにされました。

今、私たちの命を脅かしている新型コロナウイルスを前に、あらためて私たち人間一人一人がお互いに大きく影響し合う存在であることに気付かされます。「ヨコの公」の責任を感じています。

## 異体同心の信心を

大坂地区 森 秀之

源立寺法華講総会も、今年で五十回の記念総会となる予定でしたが、中国武漢で昨年末から発生した、新型コロナウイルス

の感染で無期限延期となりました。

感染は世界中に広がり、日に日に拡大して、ウイルスという見えない脅威に不安が増大していく中、世界恐慌を上回る経済的打撃となり、現役世代には、業種によっては失職という厳しい状況が、現実味を帯びてきています。

楽観視していられるのは、今のうちかも知れません。今後日本でも、政治ではコントロールが効かなくなり、治安は乱れ、



森 秀之さん

強盗や人身の荒廃が進み、世界中が戦争に向かえば、人類破滅も視野にいれて荒波を乗り越えて行くことが求められるのではないのでしょうか。

それと、正し

い信仰を目指している私たち源立寺法華講一人一人も、同様にこの状況をどのように受け止めて仏道修行するのか、を問われているのではないのでしょうか。

また、今一度正信に目覚め、大聖人様を渴仰し、法華経の行者として忍辱の鎧をまとい、仏道修行に精進していく覚悟を試されているように思えてなりません。

この状況は、七六〇年前に、大聖人様が「立正安国論」を幕府に上呈した時代そのものを、現代に再現している状況のよう

にも思えてきます。

違っているのは、明治維新後の日本人が、欧米列強からの文明を取り入れ、急速に合理的な精神性へと変遷したことが考えられます。それと、七十数年前に、第二次世界大戦で、日本全国が焦土となり、日本が壊滅し、戦前の教訓が排除され、戦後の教育方針から、日本人の精神性がさらに欧米に浸食され、菅野住職が話にされるように、唯物思考がさらに進行し、目に見えない「心こそ大切なれ」ということが、だんだん死語になりつつあることだと感じます。

「聖人御難事」に、「疫病は冥罰なり」という一節がありませんが、このウィルス感染も仏の計らいと肝に銘じて、正信一筋に迷信・盲信なく、妙法五字の余事余念ない唱題で、一瞬一瞬を精進していきたいと思います。

正しい信仰を目指す自行が、そのまま化他行に繋がると信じますが、身口意の三業にわたる正直な信仰に努めないと、仏道に叶わないと思います。

「題目唱えの題目唱えず」（日寛上人）とありますが、形だけでは一生成仏は叶わないことに改めて目覚めて、正しい信仰を次の世代に繋げることが、源立寺法華講の私たちの使命だと思います。

二度と、大聖人の教義の法盗人となって会員を洗脳したり、法主信仰や戒壇のご本尊絶対などという、大聖人様の信仰でないものに惑わされることなく、難しい教義ですが、感得していきましよう。

先にあげた「聖人御難事」の一節の後に、

「各々師子王の心を取り出だして、いかに人をどすともをづる事なかれ。師子王は百獸にをぢず、師子の子又かくのごとし。彼等は野干のほうるなり、日蓮が一門は師子の吼ゆるなり。…：月々日々につより給へ。すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし。」

と、師子王の心を取り出して、月々日々たゆまず仏道修行に励みなさいと仰せです。また、

「彼のあつわら（熱原）の愚痴の者ども、いみはげましてをと（落）す事なかれ。彼等にはただ一えん（円）にをもち切れ。よからんは不思議、わるからんは一定とをもへ。ひだるしとをもわば餓鬼道ををしへよ。さむしといわば八かん地獄ををしへよ。をそろししといわばたか（鷹）にあへるきじ（雉）、ねこ（猫）にあへるねずみ（鼠）を他人とをもう事なかれ。」

と、さらに慢心、過信しないように、何なることも我がことのように引き当てる現実を直視し、身軽法重の精神をもってすることこそが、仏になる修行であるとも仰せです。

最後に、源立寺法華講が未来に法灯相続して信心修行していくために、「異体同心事」の、

「はわき房・さど（佐渡）房等の事、あつわら（熱原）の者どもの御心ざし、異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事成ぜん事かたし。日蓮が人類は異体同心なれば、人々すくなく候へども大事を成じて、一定法華経ひろまりなんと覚え候。悪は多けれども一善にかつ事なし。」

との御文を、深く心肝に銘じて信心修行に励んでいきます。

# 恵日だより

## 春季彼岸会法要

三月十八日～二十一日

今年のお彼岸は春めいた好天に恵まれましたが、国内の新型コロナウイルス感染症の流行に対応して、密集、密閉、密接の三密を避けるため、通常のお彼岸の中日の法要を、特別に人数制限の意味も含めて、十八日から二十二日まで、地区別に分散しての奉修に変更されました。

各日の法要は、午後一時から始まり、出仕鈴とともに出仕されたご住職により、献膳、読経、焼香、唱題、回向と如法に進められ、参詣した檀信徒が、それぞれ有縁の故人や先祖の霊を偲びつつ、お焼香・ご回向をしました。

引き続き、ご住職よりご挨拶がありました。

### ご案内・お知らせ

#### \*第五十回法華講総会延期

本年五月十日(日)に予定しておりました、第五十回源立寺法華講総会は、昨今の新型コロナウイルス感染症予防対策の一環として、開催を無期延期させていただきま

す。

開催時期は、今後の推移を見守り、安全が確認されることが前提になりますので、今秋か来年前半にまでずれ込むことになる予想します。決まりましたら寺報『恵日』・法華講連絡網等にてお知らせいたします。

講員のみなさまには、不要不急の外出を控え、密集、密閉、密接の「三密」を避け、マスク着用や手洗いの徹底など、感染症対策に努めていただき、総会開催の折には全員が元気に集い合えますよう、くれぐれも気を付けてお過ごし下さい。

#### \*ご案内

※玄関・トイレ等にアルコール消毒液が  
おいてありますので、参詣の際は必ず  
ご利用下さい。

※また、マスクの必要な方はお申し出下さい。

※第五十回総会記念の投稿は引き続き歓迎  
致します。

※根付き櫛は、月末に入荷します。



### 祝初参り

・高石市 古田 風なまさん

この度、右の方が、御授戒をお受けになりました。  
おめでとうございます。



# 五月の行事



十日 (日) 午後一時 お講

十三日 (水) 午後一時 お講

※月例お講は、二メートル間隔をとるため、定員二十名以内とします。

※五月度も、参詣の方は必ず電話で予約をお願いします。

※年回法要、御授戒、その他の参詣もなるべく電話でご確認下さい。

※六月号の継命・恵日発送は、『北摂』地区が担当です。  
七月号の継命・恵日発送は、『豊能』地区が担当です。

## 【卑月詠草】

〔和風〕

はるばると 訪ひ来し土佐の 四方十川  
遠き水面を 川鶺飛び立つ  
炭焼きの 窯に立ち寄り いにしへの  
父や母らの 姿かさぬる

〔故奥 はつ〕

白砂に しみゆく清水 さながらに  
身にしみとほる 万葉のうた  
とのぐもる 空の何辺か ほととぎす  
初音洩らしぬ 茶をつむ吾に



## 【恵日俳壇】

〔農婦〕

昨日より少し良き日や目刺喰む  
やはらかき独活さつくりと切り出さる

〔森 秀之〕

あいさつが心にひびく春の山  
生ひぎまを桜にならふ潔よし  
桜散る川の流れに風の舞う

## 恵日

令和二年五月号 通巻三〇四号

令和二年五月一日発行

編集兼  
発行人

菅野 憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (072) 751-3135  
E-Mail: gkanno@silk.ocn.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円  
加入者名 恵日編集室会計  
〒振替 口座番号 013801212649